

日韓文化交流基金 NEWS



No. 86 2018.6.28 Contents

1-3 青少年交流事業

- ・韓国・チャンネルWのスタッフが見た日本
- ・交流エッセイ 訪韓事業参加者感想文
愛知県岩倉市立岩倉東小学校 教諭 稲田 真人

4-5 青少年交流事業

- ・日韓両国が手を携えて、学生たちが未来に向けてできること—3月実施の日本大学生訪韓団（第3団）の記録から

6 フェローシップ・助成

- ・2018年度 訪日・訪韓フェローシップ 採用者決定
- ・2018年度 助成対象事業決定

7 助成事業紹介

- ・神戸仁川芸術交流プロジェクト 東アジアのアートネットワーク構築に向けて
神戸大学 名誉教授・彫刻家 JUN TAMBA

8-9 フェロー研究紹介

- ・朝鮮俳句をめぐる日韓文化交流史の研究
愛媛大学法文学部 教授 中根 隆行

10-11 事業報告

- ・青少年交流事業
- ・理事会・評議員会開催

12 交流エッセイ

- ・都立日比谷高校のグローバル教育の取組について
東京都立日比谷高等学校 校長 武内 彰

訪日団参加者インタビュー

韓国・チャンネルWの スタッフが見た日本

今年1月に行われた韓国青年沖縄産業視察団に、チャンネルWで「오늘의 일본（今日の日本）」の番組制作を担当しているスタッフが同行取材を行いました。同行取材は2015年から数えて今回で3回目となり、当基金の実施する訪日プログラムの様子が番組で紹介されてきました。3回の取材を担当した番組プロデューサーが、どんなきっかけで日本に関心を持つようになり、取材を通してどんなことに着目したのか、お話を伺いました。

●「3回の同行取材でそれぞれ見えてきたもの」

チャンネルWプロデューサー 李 準 豪（イ・ジュンホ）さん

2014年に開局したチャンネルW（<http://www.chw.co.kr>）は、日本文化を韓国に紹介する韓国国内で唯一の日本専門コンテンツチャンネルです。日本で人気のあるテレビ番組「孤独のグルメ」を韓国国内でもほぼリアルタイムに放送する取り組みや、独自取材をもとに日本の情報を伝える番組「오늘의 일본（今日の日本）」、「두근두근 도쿄（ドキドキ東京）」などを制作し放送しています。

最近では主に、月に一度は日本での現地取材を行い、それを番組で韓国に伝える仕事をしています。そんな私が、日本に関心を持つようになった理由はいろいろありますが、まず思い浮かぶのは幼いころのある出来事が、きっかけといえます。



「ドキドキ東京」の都内での撮影シーン（写真左側が李準豪プロデューサー）

公益財団法人 日韓文化交流基金

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町2丁目21-2 ユニゾ水道橋ビル5F
tel. 03-6261-6790 / fax. 03-6261-6780



テコンVとマジンガーZ

日本に関心を持つようになったきっかけは、夢中になっていた韓国のロボットアニメ「テコンV」にまつわる出来事にあります。私が小学生だった1980年代、「テコンV」は子どもたちの間で大人気になっていました。もちろん私も、そのアニメが大好きでした。そんなある日、友達と「テコンVと日本のマジンガーZのどっちが強いかな？」と話すうち、言い争いになり、「僕のお父さんが言っていたけど、テコンVは日本のマジンガーZのコピーなんだって」という彼の一言に腹が立ち、最後はケンカになってしまいました。不思議なことですがこのことが契機となり日本の文化に関心を持つようになりました。

中学生になった90年代初めはまだ日本の大衆文化開放前でもあり、公に流通していたものではないのですが、日本の漫画本や、テレビゲームなどを買い集めたりしていました。現代の若者には想像できないかもしれませんが、インターネットが無い中でも、日本文化に関する知識と情報の交換が友達同士の間で積極的かつ日常的に行われていた時代でした。

日本文化開放へ

1998年の日韓パートナーシップ宣言を経て、映画などの日本の大衆文化が段階的に開放となり、これまでのようにこっそりとではなく、公に思う存分楽しめるようになりました。そして、これまで知ることのできなかった、アニメに登場するキャラクターの名前がわかり、映画館の大きなスクリーンで日本の映画作品を楽しむことができるようになりました。特に、中山美穂主演の映画「ラブレター」は韓国国内で爆発的なヒットとなり、彼女を知らない韓国人はいないといわれるほどの人気ぶりでした。

そんな私の日本観をさらに広げてくれたのが、当時交際していた、日本人留学生の恋人の存在です。彼女を通して、日本人たちの心を知り、本当に近い隣人として、気持ちを分かち合える関係になれるのだと思うようになりました。

訪日プログラムで触れた日本の心

訪日団の日程には、ホームステイが含まれているのですが、毎回ホストファミリーとのお別れでは、ほとんどの学生たちが涙を見せており、2、3日一緒に過ごしただけで、なぜそんなに泣くのか疑問に思っていました。ところが、3回目の同行取材を機に考えが変わりました。

ホームステイが終わり、バスが出発しようとしているときに、とても悲しそうに涙を流しているある男子学生の姿が目に入りました。彼にインタビューしたところ、ホームステイ先のお母さんがとても心温まるもてなしをしてくれ、さらにその姿が幼いころに亡くなった彼の母親の面影と重なり、「お母さんに会いたい」と言って涙を流していました。そんな彼の姿に私自身も涙を堪えることができませんでした。



お母さんとお別れに涙を流す男子学生

もう一つ、日本の心を感じさせる出来事がありました。「戦争は絶対にいけない。戦争には勝者も敗者もない」という、ひめゆり平和祈念資料館を訪れた時に聞いた同館の島袋館長の言葉です。戦争を直接経験された方からの気持ちのこもった言葉は、きっと韓国の学生たちの心の奥深くに刻まれたことと思います。

これらの出来事にも表れているように、訪日プログラムを通して、日本人たちの心に触れたことは、参加した全ての韓国の青年たちの日本観に大きな変化をもたらしていることと思います。



沖縄伝統のエイサーの体験をする訪日団一行

同行取材を通じて感じた、これから日韓で必要なこと

今年1月の取材で、韓国人と日本人が友人となるにはどんな事をしなくてはいけないかと、多くの人に話を聞きました。なかでもあるホストファミリーのお父さんが言っていた、「お互いに顔を合わせ、コミュニケーションをとることが重要だ。頻繁に出会い、お互いが顔を向き合わせると、素直に意思疎通もできて、さらに相手を良く理解することができる」との言葉が印象深く残っています。今回の取材を通して、私も同じ気持ちになりました。これからも、日本人と韓国人が出会い、友人となる機会を増やし、お互いの話に耳を傾け、話し合うことで、多くの問題が解決できるのではないかと思います。

チャンネルWとしても、日本専門チャンネルとして番組制作に励みながら、多くの人たちの気持ちを一つにし、日韓両国の民間交流に邁進していきたいと思います。「私たちは友達」となれるように。

私たちに今できること

2017年度 日韓学術文化青少年交流事業訪韓団（第1団）参加者

愛知県岩倉市立岩倉東小学校 教諭 稲田 真人

長いようであっという間だった10日間の研修。私にとってこの10日間は、大変貴重で密度の濃い期間であったと思います。たくさんの人との出会いは、学びが多く、自分を振り返る良いきっかけにもなりました。本研修に参加できたことを心から嬉しく思います。

研修を通して特に印象に残ったことは、まず、韓国人は日本よりも定年退職が早く自営業が多いということです。一般的に50代で会社を名誉退職するカリストラされるかがほとんどであるため、子どもたちがなりたい職業1位は、62歳で定年になる教師だと聞きました。子どもたちには高学歴の大学へ進学して安定した職業に就いてもらうために、親は教育熱心であることも聞きました。そのため、3歳頃から英語教育を始め、裕福な家庭ほど多くの学習教材を子どもに買い与えたり、習い事へ行かせたりする等、親の苦勞を感じました。しかし、このように熱心な教育によって子どもが高い学力を手に入れる一方で、国際比較研究の結果で幸福を感じているかという内容において多くの項目が最下位を占める等、子どもたちの幸福感が損なわれているという現状に驚き複雑な気持ちでした。

二つ目は、韓国の教員と交流できたことです。韓国でもいじめに対する問題は深刻で、共通の悩みを話し合うことができました。いじめを早く見つけるためにアンケートを実施することや専門の教員を配置すること等、様々な取り組みがされていることが分かりました。また日頃からいじめをなくす雰囲気作りや教師と子どもとの信頼関係を築いていくことの大切さについて、教師としての立場から考えを共有することができた瞬間でした。

三つ目は、ホームステイ先で交流ができたことです。プライベートで韓国を旅行した経験やメディアから得た韓国に関する知識よりも、実際に現地での生活を体験し、現地の人々と会話をすることが韓国を本当に知る上で一番大切なのではないかと思います。

す。どんなところで買い物をして、どんなものを食べて、どんな家に住んでいるのか、その一つ一つが新鮮で興味深いものでした。ホストファミリーは私たちを快く受け入れてくださり、とても親切でした。お互いの言語は話せなくても思いを伝えようとする気持ちや相手を理解しようという気持ちがひしひしと伝わるだけでも、お互いに少しずつ打ち解けていくのが分かりました。

現地を訪問し、現地の人々と交流しなければ知りえなかったことや感じられなかったことが数多くありました。訪問前に比べて、韓国により親近感をもつことができたように思います。日本と韓国が「近いようで遠い国」から「良き隣人」になるために、私たちに今できることは、本研修に参加し、学んだことをSNS等で広く発信していくことや、ホストファミリーや現地で知り合った韓国人と今後も連絡を取り合っていくことだと思います。また、他国の文化を知る前に自文化や歴史背景について学び、過去に起こった事実を受け止めることも大切だと思いました。一人一人が「今できることをする」ことが両国の関係を改善する糸口になるのではないかと思います。



ソウルジャムヒョン小学校訪問の記念に同校関係者と訪韓団団員たち

PROFILE

稲田 真人 (いなだ まさと)

愛知県岩倉市立岩倉東小学校勤務。

日本在住の外国にルーツをもつ子どもたちが、日本の学校に適應していきけるよう教科指導や日本語指導に力を入れている。

日韓両国が手を携えて、学生たちが未来に向けてできる

当基金は創立以来、日韓間の相互理解と信頼関係の増進という目的のもと、様々な交流活動を行ってきました。近年、両国間では互いの文化に対する膨大な量の情報が行き来するようになりましたが、他方で、様々な課題にも直面しています。事業の実施にあたっては時代的要請に応えていくことが必要であり、そのような観点から、今回、日韓の近現代史に焦点をあて、関連史跡等を訪れながら両国の関係史について理解を深めるとともに、韓国現地の大學生との交流を通じて、「日韓両国が手を携えて、学生たちが未来に向けてできること」について考える訪韓プログラムを実施しました。この訪韓団には団長として大澤文護氏（千葉科学大学教授、元毎日新聞ソウル支局長）、公募で全国から集まった40名の大學生が参加しました。

訪韓中は、釜山、大邱、仁川などの市街地に今も残る日本統治時代の建物の見学や、朝鮮半島に生きた浅川巧や田内千鶴子といった日本人たちの足跡などにも触れました。プログラムに参加した学生たちが何を見て、どのように感じたかをご紹介します。

参加者の感想

- ・今まで韓国の大學生は反日教育だけを受けていると思っていたが、今回の現地大學生との交流で、決して日本を全否定しているわけではないとわかった。
また、韓国に比べて日本の歴史教育は不足していると思っていたが、ディスカッションを通じて、現地大學生が日本側の認識を知らないことに気づき、必ずしも日本の歴史教育が不足しているわけではないと思った。他にも、韓国の大学教授や記者による講義を通じて、日本で報道されている韓国のイメージがすべてではないとわかった。
(西南学院大学4年・女性)
- ・現地大學生とのディスカッションを通じて、自分が思っていたよりも韓国社会が複雑で、ダイナミックな動きを見ていることを学んだ。大変濃密なプログラムで、新たな学びや発見が数多くあった。本プログラムに参加したことで、韓国に交換留学し、韓国社会についてより理解を深めたいと思うようになった。
(東京大学1年・男性)

- ・日韓関係を語る上で重要な人物について、実際に足を運びながら学ぶことができたのは大変貴重な経験だった。韓国で日韓近現代史をどう伝えているのかを学びながら、同じ歴史を共有していても、歴史の中で重視している部分や認識が異なることを実感し、改めて日韓相互理解の難しさを感じた。
(福岡女子大学4年・女性)
- ・韓国を訪問し、浅川巧氏や李秀賢氏の墓所を参拝したことで、日本と韓国の間で人として素晴らしいことをした人たちが自分が知らないところにいたことを知り、韓国という国がより身近に感じられるようになった。今回のプログラムを通じて、自分が日本や韓国の歴史について知らないことが多いと感じた。本プログラムがなければ、歴史認識について考えることがなかったと思う。歴史について考えるきっかけとなった本プログラムに感謝する。
(広島大学3年・男性)

主な日程

- 3月1日 釜山へ出発、釜山市内見学（草梁イバク道）
- 3月2日 釜山市内見学（草梁倭館跡地、釜山市立公園墓地内慰霊碑）、在釜山日本総領事館表敬訪問、Cool Japan Reporterとの交流会
- 3月3日 大邱市内見学（寿城池、水崎林太郎翁墓所）
大邱地域大學生との昼食交流会、共同フィールドワーク、交流会
- 3月4日 木浦市内見学（金大中ノーベル平和賞記念館、木浦共生園）
- 3月5日 李永春博士と熊本利平氏に関する講義、群山市内見学（李永春家屋）、群山地域の韓国大學生との共同フィールドワーク



- 3月6日 ソウル市内見学（大韓民国歴史博物館、昌徳宮）、Cool Japan Reporterとの夕食交流会
- 3月7日 メディア関係者による講義、ソウル市内見学（浅川巧氏墓所）、在韓日本大使館公報文化院表敬訪問、ソウル地域大學生との交流会
- 3月8日 仁川市内見学（旧日本文人居留地、仁川上陸作戦記念館）
- 3月9日 南北軍事境界線付近見学（板門店、臨津閣公園、自由の橋）、成果報告会
- 3月10日 ソウルより帰国



こと—3月実施の日本大学生訪韓団(第3団)の記録から

真実を知るための旅は何度でも～大学生訪韓団第3団に参加して考えたこと～

2017年度 日本大学生訪韓団(第3団) 団長 **大澤 文護**
(千葉科学大学教授、元毎日新聞ソウル支局長)

真実を知るための旅は1度だけで終わってはいけません。2度、3度、4度と同じ場所を訪ね、同じ人々と話し合わなければ本当のことは何も分からないのです。遠来の客には気を遣います。「こんなことを言うてしまうのは失礼になるのではないか」「相手を傷つけてしまうのではないか」。そんな思いから、いつもとは違う不自然な自分を見せ、逆に何か答えなければという親切心から、事実とは違う話をしてしまうことがあるのです。2度、3度、4度と相手を訪ね、打ち解けてくるにつれて、相手は本音を話し出します。その話が私たちの心に突き刺さるような、聞いているのがつらくなるような内容だったとしても、私たちは、その声に耳を傾けねばなりません。

日本と韓国の近・現代をテーマに「韓国に残る日本」を探し求めた今回の旅は、韓国の研究者や大学生の協力で実にスムーズに終了しました。韓国の学生たちと各地で一緒に食事をし、冗談を言い合い、大笑いしたことでしょう。大邱では旧日本人街に残る建物を利用して日韓文化交流のスペースを作った韓国の専門家の努力を目の当たりにしました。群山では、日本人農場主と韓国人医師が韓国農村医療の基礎となる診療所を作り上げた話を韓国の研究者から聞くことができました。日本人農場主と韓国人医師の交流を「民主主義とヒューマンイズムの観点から、もう一度見直す必要がある」と語った群山大学校、表世晩(ピョ・セマン)教授の言葉は、参加者の皆さんの心に残ったことでしょう。

しかし忘れてはいけません。彼らは私たちを、「お客さん」として受け入れてくれたのです。日韓の辛い歴史を未来にどのように伝えていくべきかを日々考える彼らは、時には無理解な日韓双方の人々の言動に悩み、徒労さを感じることもあるはずです。

旅の途中、皆さんに読んでいただきたい本として紹介した、民族音楽研究家、草野妙子さんの著書『アリランの歌 韓国伝統音楽の魅力をさぐる』(白水社、1984年)に、このような一文があります。

「われわれ日本人は、まったく異質の文化を持つヨーロッパの研究となると、初めから通ずるものが少ないために、本腰を入れて研究しなければならない。ところが隣国の民族である韓国の研究となると、同じアジア人であるために、少し勉強すると短期間のうちに、50%くらい理解

することができる。同質の事象が多いためである。このことが、かえってあとの50%を理解しようとするときの障害になったり、安易にかんがえてしまう原因になるのではないだろうか。実は、このあと半分の研究が非常に大切なのだが…」

まったく同感です。韓国を数回旅行し、韓流ドラマを見て、K-POPSを聞き、韓国料理をおいしく食べれば「もう韓国は十分理解した」とばかりに、韓国の良い(と思った)ところや悪い(と思った)ところを声高に話し出す人がいます。そういう人ほど、韓国のことは何も分かっていないと感じることが多いものです。

次の皆さんの韓国の旅は、今回ほど楽しくないかもしれません。一緒に食事をしたり、冗談を言い合ったりした韓国の学生が「実は」と日韓の歴史にまつわる悲しい、そして厳しい話を切り出すかもしれません。そこで怯(ひる)んではいけません。相手の話に耳を傾け、そして自分の感じたことを正直に話しましょう。それで、しばらく仲違いするかもしれません。ただし、時間をおいて彼らと再会する勇気を持たなくてはなりません。

2つの異なる歴史と文化を持つ国の人々が、本当に理解し合うには、そうした勇気と粘り強さが必要なのです。

そろそろ次の旅の準備を始めてください。その旅で経験したことを、いつか私に教えてください。皆さんが苦勞の末に、パソコンやスマホを通してでは決して触れることのできない真実をつかみ取り、国境と民族、そして歴史や文化の違いを超越した友人を数多く作ることができるよう、私は大いに期待しています。

감사합니다.

PROFILE



大澤 文護 (おおさわ ふんご)

1957年生まれ。1997年より5年間、2009年より2年間、毎日新聞ソウル特派員・ソウル支局長を務める。2009～10年に特派員生活の傍ら韓国伝統舞踊を学び、ソウルの世宗文化会館Mシアターで舞台に立った。現職は千葉科学大学危機管理システム学科教授。著書に「北朝鮮の本当の姿がわかる本」(94・こう書房)、「金正恩体制形成と国際危機管理—北朝鮮核・ミサイル問題で日本人が本当に考えるべきこと」(2017・唯学書房)、共訳書に「砂漠の戦場にもバラは咲く」(03・毎日新聞社)がある。

2018年度 訪日・訪韓フェローシップ 採用者決定

2018年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。

訪日33名、訪韓4名の応募があり、このうち訪日フェローは6名、訪韓フェローは1名が採用されました。

訪日フェロー

氏 名	研究テーマ	所属機関	職 位	受入機関
李 鋌	高齢・低成長時の労働法の課題と展望 ー日韓比較労働法の視点からー	韓国外国語大学校法学 専門大学院	教授	東京大学大学院法学政治学研究科
鄭志允	東アジアの木塔の寸法体系と 造営技術に関する研究	東京大学大学院 工学系研究科建築学専攻	博士課程	東京大学大学院工学系研究科
玄在煥	冷戦期韓国の遺伝学研究と日本の遺伝研究 ネットワークの相互作用に関する研究	漢陽大学校創意融合教育院 科学哲学教育委員会	講師	東京理科大学工学部
裴銀貞	「受動動詞+テアル」文を中心とした結果相 のアスペクト表現の総合的考察	釜山外国語大学校英・日・ 中大学日本語創意融合学部	教授	福岡女子大学国際文理学部
金善花	日韓宮廷文学と教育 ー「后がね教育」に注目してー	木浦大学校人文学部日語日 文学科	教授	鶴見大学文学部
吳永台	幕末維新の政治変革と熊本	東京大学大学院総合文化研 究科	博士課程	東京大学大学院総合文化研究科

訪韓フェロー

氏 名	研究テーマ	所属機関	職 位	受入機関
伊藤弘太郎	韓国防衛産業に関する研究 ー冷戦以後の韓国国防政策の変化を中心にー	一般財団法人キャノン グローバル戦略研究所	研究員	高麗大学校一民国際関係研究院

2018年度 助成対象事業決定

2018年度助成対象事業には78件の申請があり、この中から13件への助成が決定しました。

助成対象事業一覧（実施日時順）

事業名	申請団体	実施期間	場所
朝鮮通信使祭り2018（韓国・釜山）におけ る日韓交流演舞	はなごりあ	2018/5/3 - 2018/5/7	釜山・龍頭山公園、光復路ほか
福岡ー釜山の交流拡大に向けたシンポジウム ～日韓シンクタンク合同成果報告会	公益財団法人 九州経済調査協会	2018/5/30 - 2018/5/30	九州経済調査協会会議室
東京デスロック+第12言語演劇スタジオ『ガ モメカルメギ』	一般社団法人 unlock	2018/6/20 - 2018/7/8	KAAT神奈川芸術劇場
日韓次世代学術フォーラム 第15回国際学 術大会	日韓次世代学術フォーラム	2018/6/29 - 2018/7/2	静岡県立大学
演技集団朗・劇団マシル合同ワークショップ	演技集団 朗	2018/7/12 - 2018/7/23	東京・国立オリンピック記念青少年総 合センター、日暮里ART CAFÉ百舌
日韓青少年交流訪韓団	日韓親善協会中央会	2018/7/22 - 2018/7/27	ソウル、公州、扶余ほか
日韓学生未来会議（Japan Korea Students Future Forum）	第13回 日韓学生未来会議	2018/8/5 - 2018/8/10	長崎カトリックセンターユースホステル
互いのことを学ぶ日韓の中高校生交流プロ グラムーSEOULでダンス・ダンス・ダンス2018	公益財団法人 国際文化フォーラム	2018/8/7 - 2018/8/12	ソウル・ソウルユースホステル
第10回福岡インディペンデント映画祭 （FIDFF）2018	福岡インディペンデント 映画祭実行委員会	2018/9/6 - 2018/9/11	福岡アジア美術館、福岡市科学館
「日韓交流おまつり2018 in Seoul」徳島市 阿波踊り派遣事業	阿波踊り振興協会	2018/9/8 - 2018/9/10	ソウル・COEX国際展示場ホールD
「日韓交流おまつり2018 in Seoul」亀鶴屋 派遣事業	亀鶴屋	2018/9/8 - 2018/9/10	ソウル・COEX国際展示場ホールD
「バリ姫神話」日韓共同舞台製作プロジェクト	シルクロード能楽会	2018/9/25 - 2018/9/30	富平アートセンタービョルヌリ劇 場、アートセンタースタジオ
日韓交流事業「韓国版・土管」	劇団B級遊撃隊 海外制作部	2018/10/1 - 2018/11/4	ソウル・トンスン舞台小劇場

（2018年4月末現在）

神戸仁川芸術交流プロジェクト 東アジアのアートネットワーク構築に向けて

神戸大学名誉教授・彫刻家 **JUN TAMBA** (塚脇 淳)

①「白衣の暮らし」展の開催について

一昨年から始動した神戸仁川芸術交流事業の第2弾として、今年度は柳銀珪（リュ・ウンギョ）氏が30年来撮り続けている「青鶴洞（チョンハクトン）」という儒教の村の人々や生活の写真作品、そしてまた青鶴洞では昔ながらの韓服を身に着けて生活をしていて柳氏の写真にも韓服を着た多くの人が写っていることから、韓服作家尹炳玉（ユン・ビョンオク）氏の伝統的韓服を、2月3日から25日までC.A.P.が運営する神戸市立海外移住と文化の交流センターのギャラリーで展示しました。2月4日には招待作家3名と日本側2名による「日韓芸術交流シンポジウムー神戸仁川芸術交流に向けてー」を開催。神戸の芸術NPOであるC.A.P.の活動や神戸大学の芸術文化の取り組みを話題に、芸術関係者だけでなく一般参加者も多く交え、活気にあふれたシンポジウムとなりました。尹炳玉氏のヌビワークショップには連日近畿圏だけでなく日本各地（長崎、信州、東京など）からも参加者があり、尹氏が昼食をとる暇もないほどの盛況ぶりでした。また神戸大学でも学術Weeksの一環としてスライドレクチャーを開催しました。



尹先生によるヌビワークショップの様子



展示会のオープニングパーティー

② C.A.P.の活動について

この展示会を開催したC.A.P.（芸術と計画会議）について紹介します。

C.A.P.は現代美術のアーティストが集まって1994年に結成。社会とアートのより良い関係を考えて実践してきました。1999年に廃ビルになっていた旧神戸移住センターを活用し「CAP HOUSE ～ 190日間の芸術的実験」を実施。以降講演会、展示会、アーティストトークなど市民参画のプログラムを実施。2002年にはNPO法人化し建物の管理を市より受託。2009年、同建物での神戸市立海外移住と文化の交流センターの開設と共に指定管理者の一員となり、芸術国際交流や地域のアーティストを中心としたコミュニティー形成を進め、現在に至っています。宿泊施設を持たないため、ボランティアや外部宿泊施設等に頼りながらも世界各国からアーティストがやって来ています。C.A.P.のメンバーは現在、約40名です。

③ 芸術と社会をつなぐアーティスト・イン・レジデンス

近年、芸術と社会をつなぐ活動の一つにアーティスト・イ

ン・レジデンスがあります。ガイドブック*によれば、世界29ヶ国に200ヶ所以上存在し、それぞれ条件は千差万別ですが、1～2週間から数ヶ月の間アーティストが現地で制作や展示会、コンサート開催などを行い、地元の人たちやアーティストと交流することを目的としています。運営面からそれらを支えているのは個人や地域の企業などです。こういったプログラムのよい点は、作られた作品を見るだけでなく制作中の作業やプロセスを知ることができたり、一緒に食事したり酒を酌み交わしたり場合によっては作業を手伝ったりしながら交流することで互いの理解が深まっていくことです。それによって絆が生まれ、作品をめぐる互いの考えを語る機会となります。アートは作家だけのものではなく、それに関わったすべての人のものと変わっていくのです。アートが特殊な創造行為であり、限られた人々だけの存在であった時代から、人とのつながりや地域社会とのつながりを重視する方向へその在りようを変化させ始めたといえるでしょう。こういった考えと試みは、現在多くの国々や人々に支持され増々広がりを見せています。

*Guide of host facilities for artists on short-term stay in the world (Association Française d'Action Artistique 1995)

④ 東アジアのアートネットワーク構築に向けて

さて話を私たちのことに戻します。仁川は神戸ととても似ています。南に大きな港があり、チャイナタウンや旧日本人居留地、大きな倉庫が立ち並び、その倉庫の一部はアートセンターとしてコンサートやレジデンス、作品展の発表会場などいろいろな活動に使われています。仁川でギャラリーを開設している戸田郁子氏は、仁川を日本と韓国と中国の交流の場にしたいと考えています。今回招へいた戸田氏と進めている神戸仁川芸術交流事業に、世界中のアーティストとの交流の場でありたいと考えているC.A.P.が関わることで、東アジアのアートネットワークの拠点づくりの可能性が広がるでしょう。



神戸大学で講演を行う戸田郁子氏(写真左側)と尹炳玉氏(右側)

PROFILE



JUN TAMBA (塚脇 淳)

1952年生まれ。彫刻家。神戸大学名誉教授。2015年に作家名をJUN TAMBAとし活動。近年は制作プロセスを重視する彫刻シンポジウムなどに力点を移し、海外での活動が活発。釜山ビエンナーレ(韓国)、BEMISレジデンス(米国)、PENZAシンポジウム(ロシア)など。C.A.P.（芸術と計画会議）メンバー。

「朝鮮俳句をめぐる日韓文化交流史の研究」

愛媛大学法文学部 教授

中根 隆行

フェロー研究紹介のページでは、各分野で日本研究、韓国研究をされている研究者による様々な見解や研究成果を紹介しています。今号では、朝鮮俳句をめぐる日韓文化交流史をテーマに研究された中根隆行氏の研究成果について紹介します。

1. 海を越える俳句

私の研究テーマは朝鮮俳句をめぐる日韓文化交流史である。朝鮮俳句といっても、すぐにピンと来る方は少ないかもしれない。朝鮮俳句とは、日本による植民地統治下の朝鮮半島において詠まれた俳句、より広くいえば朝鮮における作句活動全体を指す言葉である。

元来、俳諧は座の文学といわれるように集団性をもつ文芸である。近代俳句もまた、芸術性が求められると同時に、その作句活動は地域のコミュニティ・ネットワークとして機能する面を多分に有している。しかも俳句は、祖国を離れて異郷に渡った日本人移民者たちに好まれて詠まれたという歴史がある。朝鮮半島はいうまでもなく、北米や南米、台湾や旧満洲などもそうであるが、現地に移住した日本人のなかでコミュニティができ、日本語新聞や雑誌が発行されると、漢詩文や短歌とともに、必ずといってよいほど俳句欄が設けられている。

近代俳句を考えると、俳句が海を越える創作文芸であるという点は、看過されやすいものの、重要な特徴のひとつである。移民者たちが移住した地で俳句を詠むのは、それが祖国の純国産の伝統詩歌であり、小説などとは異なって気軽に詠める創作文芸であったということ、加えて、句会や結社という集団性に基づく俳句のシステムが、いわば移民社会のコミュニティ形成にも寄与したからである。

2. 植民地下の朝鮮俳壇

日本による植民地統治下の朝鮮半島は、ときに朝鮮俳壇とも称されるほど、海外および外地のなかで最大の俳句王国であった。もとより、その中心となる担い手は在朝鮮日本人である。とりわけ朝鮮俳句が活況を呈した1930年代前半には、主要俳誌だけでも14誌を数えている。なかでも京城や釜山など内地から旧満洲へと向かうルート上にある都市には、高浜虚子、河東碧梧桐、飯田蛇笏といった著名俳人も数々訪れており、渡韓経験はなくとも朝鮮の俳誌の選を任される内地在住の俳人との交流も盛んに行われていた。

古くは19世紀末に遡るものの、朝鮮半島において俳句活動が本格化するのには、日韓併合条約が締結された1910年以降である。この時期の朝鮮俳句を牽引したのは、朝鮮総督府の御用新聞に改変された『京城日報』の「京日俳句」欄である。京城日報社社長はホトトギス系の重鎮で『国民

新聞』俳句欄の選を務めた吉野左衛門であり、選者は石島雉子郎や楠目橙黄子へと受け継がれていく。この時期のことを橙黄子は「蓋我々はホト、ギスの俳句を以て我が俳句の正道と信じ、ホト、ギスに於ける虚子先生選の雑詠を句作上の最高目標としてゐた」と回想している。朝鮮俳句はホトトギス系俳句が中心であったと考えてよい。

ちなみに、1910年代後半から1930年代にかけての『ホトトギス』には、在朝鮮日本人による載録句がその他の海外や外地に比べても圧倒的に多いことがわかる。

前述したように、俳句のシステムは、結社に所属する社員が俳誌



朝鮮を訪れた高浜虚子（『京城日報』より）

に投句し、その句は選者に選ばれることによって俳誌に載録される。たとえば、1920年代前半の中心的な俳誌『松の実』（京城）には、朝鮮半島全域のみならず、旧満洲からも投句者が目立っていた。松の実吟社の社員は、まず俳句を詠んで『松の実』に投句する。載録されると自身の俳句が誌面に載る。さらに次には、東京の『ホトトギス』に投句を試みる。つまり、俳句は、祖国を離れた異郷の地にある投句者が、みずからの俳句を『松の実』に、ひいては『ホトトギス』に載録しようとするような承認欲求のシステムに支えられているといえる。こうしたなかで、朝鮮俳句はやがて、内地の俳句とは異なる独自性を求めた「朝鮮郷土色」なるものを模索していくことになる。

3. 朝鮮俳人の登場

このような朝鮮俳壇の趨勢のなかで、日本語で俳句を詠む一群の朝鮮俳人たちもまた登場し、活躍している。しかも朝鮮俳人たちの多くは、木浦の俳誌『かりたご』の周辺から誕生していることは注目してよい。1927年に創刊された『かりたご』には、いつからかは不明であるが、「神仙爐俳壇」という朝鮮俳人の指導育成をめざした俳句欄があり、朴魯植（パク・ノシク）が選にあたっていたからである。

この朴魯植は、内地でも知られた朝鮮俳壇の第一人者であり、「朝鮮の子規」とも称され、

『京城日報』課題選者など朝鮮および内地で数々の選を務めた俳人である。1933年2月の『ホトトギス』には「同行者五十余人を算す」という詞書とともに、

「鮮人にホ句はやるなり月の秋」という句が載録されている。この

句からすると朝鮮俳人約50名が彼の指導を受けていたことになり、実際に金玉峰（キム・オクボン）、李永鶴（イ・ヨンハク）、張鳳煥（チャン・ボンファン）、李淳哲（イ・スンチョル）らを輩出している。

その生涯において一度も日本を訪れることもなく、木浦で親日といわれる一方、朝鮮伝統の白衣の韓服でとおし白哲美鬚と称された朴魯植にたいして、高浜虚子は「此の土地に此の人により雪解かな」（祝句、『かりたご』1927年3月）や「朝鮮の俳諧仏や朴魯植」（弔句、『かりたご』1933年7月）という句を送っている。後者は弔句とあるように、朴魯植は1933年に急逝しているのだが、高浜虚子がこの朝鮮の一地方俳人をいかに高く評価していたがわかるであろう。



朴魯植



『かりたご』の朴魯植追悼号

4. 朝鮮俳句と日韓文化交流史

植民地統治下において宗主国の伝統詩歌を詠むことで知られた朴魯植という朝鮮俳人の存在は、現在、忘れられているに等しい。また、朝鮮俳句と在朝鮮日本人にかんする研究も、植民地支配の政治性が絡むからか、なかなか進展がみられないのが現状である。だが、朝鮮俳句の歴史は、日本の敗戦／朝鮮半島の解放後も、日韓文化交流史へと私たちを変えて展開している。

朴魯植の死後、『かりたご』を支えた村上杏史は、外地引揚者として愛媛に帰還する。高浜虚子とも親交があった

村上は、『ホトトギス』に李桃丘子という韓国俳人の俳句が載録されていることを知り、彼に朴魯植の遺族の安否を尋ねる書簡を送っている。ここから交友が始まり、李桃丘子はやがて村上の主宰する俳誌『柿』の同人となる。この李桃丘子こと李漢水（イ・ハンス）は、1940年頃より俳句を独学で学び、その生涯において俳句を詠み続けた韓国俳人である。

それではなぜ、李桃丘子は韓国で俳句を詠み続けたのか。彼の父が1943年に西大門刑務所に収監されていることを踏まえると、親日家であったとは判断できない。数少ない資料から推測すると、李桃丘子は、季節の景物をとりあげ言葉に綴る俳句という文芸性に惹かれたと考えられる。この李桃丘子や李永鶴、崔炳璉（チェ・ビョンリョン）らの活動が、現在の韓国における韓国語俳句を含めた俳句活動の源流である。

朝鮮俳句は、確かに日本による朝鮮半島の植民地統治のなかで展開された。それは宗主国の伝統詩歌が支配／被支配の力学のなかで紡がれていったことの証左である。しかし、朝鮮半島でなされた朝鮮俳句の営為は、そのみに収まるわけではない。敗戦／解放後の道程にも目を配れば、朝鮮俳句は、村上杏史と李桃丘子に象徴されるような日韓文化交流史へと繋がっていく。こうした朝鮮俳句をめぐるさまざまな軌跡をより詳細に追うことが今後の課題である。

日韓文化交流基金のフェローシップを得て、2016年4月から半年間、高麗大学校グローバル日本研究院の客員教授として研究に従事することができた。ふだんは校務の合間を縫って韓国に渡航しても、数日間程度しか日にちを割くことができない私にとって、とても貴重な経験であった。

フェロー研究では、朝鮮半島で刊行された俳誌などの未見資料の調査収集はもとより、韓国での俳句活動や俳句研究の現在にかんする知見についても広めることができた。

末筆ながら、このような機会を与えていただいた日韓文化交流基金のみなさまに感謝を申し上げたい。

PROFILE



中根 隆行（なかね・たかゆき）

1967年三重県生まれ。早稲田大学第二文学部卒業、筑波大学大学院文芸・言語研究科修了。博士（文学）。現在、愛媛大学法文学部教授。専門は日本近現代文学・文化誌。『〈朝鮮〉表象の文化誌—近代日本と他者をめぐる知の植民地化』（新曜社、2004年、単著※2011年にソミョン出版から韓国語版も刊行されている）、『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』（ひつじ書房、2016年、共著）、『〈異郷〉としての日本—東アジアの留学生がみた近代』（勉誠出版、2017年、共著）などがある。

日韓文化交流基金事業報告

本号では、2017年度第4四半期（2018年1月1日から3月31日まで）の実施事業を紹介します。

1 青少年交流事業

訪日団

団体名	計	計	男	女	期 間	主な訪問先
韓国青年訪日団 (第6団)	朴株亮 (パク・ジュヨン) 九龍浦近代文化歴史館 名誉館長	36	17	19	1/16 ~ 1/25	昭和女子大学、国際教養大学、秋田県(仙北市、秋田市、湯沢市)、岩手県西磐井郡平泉町
韓国青年訪日団 (第7団)	姜公宅 (カン・コンテク) 翰林工業高等学校 校長	36	12	24	1/16 ~ 1/25	デジタルハリウッド大学、東京都立三鷹中等教育学校、秋田県立大曲農業高等学校、秋田県仙北市、岩手県(岩手郡雫石町、西磐井郡平泉町)
韓国青年沖縄産業 視察団 (韓国青年訪日団 (第8～9団))	鄭相冀 (チョン・サンギ) 韓南大学校 法学科 教授 張良光 (チャン・ヤングァン) カトリック大学校 日語日本文化学科 助教授	73	30	43	1/23 ~ 2/1	神奈川県横浜市、沖縄県(中頭郡読谷村、国頭郡、名護市、うるま市、那覇市、南城市、糸満市)
韓国青年訪日団 (第10団)	呂善九 (ヨ・ソング) 光新高等学校 日本語教師	36	11	25	2/20 ~ 3/1	郁文館高等学校、大柿高等学校、広島県(広島市、江田島市、廿日市市、尾道市)、岡山県(岡山市、倉敷市)
韓国青年訪日団 (第11団)	黃錫均 (ファン・ソッキュン) 論山大建高等学校 日本語教師	36	11	25	2/20 ~ 3/1	大東文化大学第一高等学校、兵庫大学、兵庫県(南あわじ市、淡路市、神戸市、加古川市、姫路市)、岡山県(岡山市、倉敷市)



韓国青年訪日団（第6団）着物着付け体験（東京都台東区）



韓国青年訪日団（第7団）東京都立三鷹中等教育学校での部活動体験（東京都三鷹市）



韓国青年訪日団（第8～9団）ホームステイ（沖縄県読谷村）



韓国青年訪日団（第8～9団）韓国語学習者との交流会（神奈川県横浜市）



韓国青年訪日団（第10団）原爆被害者による講話（広島県広島市）



韓国青年訪日団（第11団）大東文化大学第一高等学校での交流の様子（東京都板橋区）

訪韓団

団体名	計	計	男	女	期 間	主な訪問先
日本大学生訪韓団 (第1団)	喜多恵美子 大谷大学 文学部 国際文化学科 准教授	20	4	16	3/6～ 3/15	淑明女子大学校、東国大学校、ソウル特別市、京畿道(坡州市、城南市)、慶尚北道(慶州市、浦項市)釜山広域市
日本大学生訪韓団 (第2団)	三ツ井崇 東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻 准教授	20	5	15	3/20～ 3/29	水原大学校、慶熙大学校、ソウル特別市、京畿道(坡州市、城南市、華城市、龍仁市、水原市)慶尚北道(慶州市)、釜山広域市
日本大学生訪韓団 (第3団)	大澤文護 千葉科学大学 危機管理学部 危機管理システム学科 教授	43	15	28	3/1～ 3/10	釜山広域市、大邱広域市、全羅南道木浦市、全羅北道群山市、ソウル特別市、仁川広域市、京畿道坡州市



日本大学生訪韓団(第1団) 伝統文化(仮面劇)体験(ソウル特別市)



日本大学生訪韓団(第2団) 慶熙大学校国際キャンパスでの交流(京畿道龍仁市)



日本大学生訪韓団(第3団) 大邱地域の大学生との交流会(大邱広域市)

2 理事会・評議員会開催

3月29日に平成29年度臨時評議員会および第76回理事会が開催され、新評議員2名(吉田光男 東京大学名誉教授・放送大学名誉教授、平田オリザ 劇作家・演出家・劇団青年団主宰)の選任が決議されると共に2018(平成30)年度予算案が承認されました。

吉田 光男 (よしだ みつお)

東京大学名誉教授、放送大学名誉教授。博士(文学)。1946年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。東京外国語大学朝鮮語科助教授、東京大学大学院人文社会系研究科教授、放送大学教授、同副学長などを歴任。

平田 オリザ (ひらた おりざ)

劇作家、演出家、劇団青年団主宰、こまばアゴラ劇場芸術総監督、城崎国際アートセンター芸術監督、大阪大学COデザインセンター特任教授。1962年生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。1995年『東京ノート』で第39回岸田國土戯曲賞受賞。1998年『月の岬』で第5回読売演劇大賞優秀演出家賞、最優秀作品賞受賞。

都立日比谷高校のグローバル教育の取組について

東京都立日比谷高等学校 校長 武内 彰

●21世紀を切り拓くグローバル・リーダーの育成

本校では、将来グローバル・リーダーとして活躍できる資質・能力を備えた生徒を育成しようとしています。そのためには、「確かな教養」と「豊かな人間性」を本校3年間の生活の中で培ってほしいとの思いをもって、教育活動を展開しています。

具体的には大学入試科目になくても、すべての科目を授業として当たり前に進んでもらっています。理科は物理・化学・生物・地学の基礎科目は必履修です。また、地歴公民も、日本史・地理・世界史・倫理・政治経済は必履修となっています。

このように確かな教養の土台の上に、大学以降での高い専門性を積み重ねた人が、将来の社会生活において、新たな知や価値を創造していくと考えています。また、部活動や学校行事にも尽力する中で、他と協働し、共通の目標に向かって切磋琢磨する体験を通して、リーダーとして相応しい豊かな人間性を身に付けていくことができるのです。

●グローバル・リーダー育成海外派遣研修の実施

このような理念に基づいて、これまで継続実施してきたSSH（スーパーサイエンスハイスクール）海外派遣研修に加えて、平成27年度よりグローバル・リーダー育成海外派遣研修（ボストン・ニューヨーク研修）を新設し、毎年12名の2年生を派遣しています。ハーバード大学、MITの訪問に加え、ニューヨークのアспен研究所において世界の食料問題の解決策を専門家の前でプレゼンテーションすることに主眼を置いています。これは文科省のSGH（スーパーグローバルハイスクール）指定校申請のために創り上げたプランですが、申請が通らなかったために、東京都教育委員会から東京グローバル10の指定を受けて実現させたものです。



2017年10月ミチュホル高の生徒たちが日比谷高校を訪れ、星像の前で記念撮影

生徒たちに身に付けさせたい力として、「柔軟で論理的な思考力」「英語をツールとして使いこなす力」「発信力・提言力」を掲げ、それらの育成に

向けて取組を継続しています。専門家からは厳しい指摘を受ける場面もあるのですが、アспенの機関誌に紹介されるなど、高い評価も得ています。

●海外姉妹校交流の新設

高校生という多感な時期に世界とのつながりを体験することで、自らの進路意識や人類に貢献する志を高くもってほしいとの思いで、平成29年度から海外姉妹校交流を始めました。ニュージーランドのコロンバ・カレッジと韓国のミチュホル外国語高等学校と短期の交換留学を実施しています。韓国との交流について述べれば、互いに10名の生徒がホストファミリー宅に宿泊し、家族の一員として異文化等に触れるとともに、授業に参加して学び合う中で、別れの時には互いに涙を流すほどの関係をつくります。日韓は政治面では必ずしも順調とはいえませんが、若いうちにしっかりとコミュニケーションをとり、分かり合おうとする経験が将来につながるものと考えています。「日常の交流と信頼関係の構築により、将来的に国際問題が生じた場合にも両国が協働して対処できる関係まで発展させることができる」のは、こうした姉妹校交流を体験した生徒たちではないか、とも考え、この交流を創設したのです。



3月には日比谷高生がミチュホル高校を訪問し、授業に参加している様子

●今後について

本校は全国公立高等学校の中でも注目される進学校ですが、これからは直接海外の大学へ進学する生徒たちが増えるのではないかと予測しています。そこを見据えて、外郭団体の御支援を得ながら、生徒のニーズに応えられるよう体制を整備していく予定です。

PROFILE

武内 彰（たけうち・あきら）

2012年、東京都立日比谷高等学校校長に着任。以来、「グローバル・リーダーの育成」を掲げて学校改革を進め、東京大学合格者数は2014年より5年連続で全国公立高等学校でトップ。また、同校140年の歴史上初めて、韓国の高校と姉妹校締結を実現した。



表紙作品 紹介

タイトル：「過去と未来をつなぐユース朝鮮通信使」
（作者：蔵田 美裕）

2014年に参加したユース朝鮮通信使訪韓団のことを想いながら、韓紙に水彩画の技法で描きました。